



夢たまご

izchan

アメジストの夜

1. 夢たまご

あなたの心が痛む時、未来の声がノックノック。

——夢たまご——

何億光年の彼方から、あなたの時をあけにくる。

空飛ぶ夢たまごの宇宙飛行

アンドロメダの星屑あつめて

銀河の光めざして

ばびゅーん ばびゅーん

青い地球を回る、まわる夢軌道

シルバー☆ふりまき

秘密の時のロードを開ける、あける夢たまご

2. 若い物書き

都会の雨はアメジスト。

夜を水底に沈め、孤独を宝石箱に紛らせる。

煉瓦のざらつきに指をすくめる者を、洞窟へと身を潜めさせる。

人生に苦悩する若い物書きが一人、

今夜も闇の襞を数え、解の見つからない問いに煩わされていました。

「なぜ人生は私に牙を向く。ただ純粋でありたいと望んでいるだけなのに。」

3. 春の光り

ふと部屋の隅に、、何とも異様な臭いが、ゆらゆらと。

／十二頭二十四舌の一匹の大蛇が、トグロいて。

／地から這い出した魔物たちが、蠢いて。

身の毛もよだつ、灯写物。

若者は恐怖に声を上げることすら覚束なく、、

ローソク一本分の、

おぼつかない輪郭の中央――

☆

光の金粉ふりかけて

春の女神がやってくる

☆

光の金粉ふりかけて

春の女神がやってくる

☆

光の金粉ふりかけて

春の女神がやってくる

☆

突然の。キラ、ラ、きら、ら。

煌めく光彩。咲き開く木蓮の花。中から、

春の女神が、

〈 春の子羊をつれ、〉

柔らかい色の薄絹をまとい現れました。

両手で、たおやかに。

光の棒が振られると、

十二頭二十四舌の一匹の大蛇と蠢く魔物たちはアーチを作りました。

4. 春の女神の導き

「どうか懼れずに。

この嘆きのトンネルを抜け、その先の勇気の途を進んでください。

けれど決して。

道端に歌う微笑みの花を踏み拉いてはいけません。

それは、あなたの心の詩そのものなのですから。」

若い物書きはアーチへ... 知らず知らず... 一步一步...

相 棒

1. キャンドルの妖精

陰鬱―― 暗い、じめじめとした、生あたたかい澱み。
世界から見放されたかのような、失意の底。

／／嘆きのトンネル／／

でも春の女神は希望の灯を用意していました。
若い物書きの足元を照らす◇キャンドルの妖精。
愛らしく、儚げな、連れ添い。

（気をつけて、物書きさん。やってくるわ。）
「やってくるって、何が？」
（しっ！）

2. 赤い怪物

途端に現れたのは、視界を覆い尽くすほどの巨漢。

赤く隆々とした筋骨、

白目に黒眼をギョロつかせ、

（さがしているの、魂たちの叫びを。

どうやらこの怪物には、

私の灯も貴方の姿も見えてはいないわ。）

この世の物とは思えぬ、形相。

ぬーっと顔を近づけられて、若い物書きは思わず、

うっうっ、嗚咽を、、

けれど、「ここには（獲物は）いないようだ！」

と怪物は通り過ぎて行きました。

若い物書きが、しばらく歩いていくと...

3. 思考を喰う化け物

ぼっ。

ぬっ。

ぬめぬめ、とした老獺な感覚が蹲っていました。

色艶のない肌は全身のヌード、

__体毛はなくて

奇怪に折り曲げられた肢体、

均衡の取れない大き過ぎる額、

（近づいてはダメよ、物書きさん！）

ふと、

ふと気づくと、引き寄せられる

ように、よう、よ、

（あの老獺は、

人の苦悩する思考が好物なの。

到る所に現れては、引き寄せて脳を攻撃するの。）

若い物書きが、さらに歩いていくと...

4. 超スピードの魔物

>シュン>シュン>
 <シュン<シュン<
 >シュン>シュン>
 <シュン<シュン<

視覚では捉えられない、超ハイスピード。
鋭角に空気を振動させて、

「あれは、何？」
（口を閉じて！
一所には留まらない性質だから、やり過ぎましょう。）

 <シュン<シュン<
 >シュン>シュン>
 <シュン<シュン<
 >シュン>シュン>

（行ったわ。
あれは、口から体の中に入って感性をズタズタにしちゃう魔物。
感性が破壊されるときに奏でる‘嘆きの音楽’が好きなの。）

留まるところを知らず、
独り。
奏でに空虚な恍惚をきく。
何故の、陰鬱。
創造と破壊。
何故の、暗澹。

自らを憐れむ魔物の詩を
シュンシュンという音の中に
若い物書きは聞いた気がしました。

その後も、いくつもの魔物たちが...

5. トンネルの出口

ようやくトンネルの出口を針の穴の光に感じて、
若い物書きはホッとしました。

◇キャンドルの妖精。

愛らしく、儚げな、連れ添い。

束の間の春の羽ばたき。

春の香しき羽ばたきよ。

嘆きの黒マントを纏い

蒼ざめた馬に騎乗する者を

温かな微風に迎えておくれ。

（私を、胸のポケットにいれて！）

何やら異様な臭気が、行く手に蠢いて・・・

花の詩

1. 蛇頭

擡げる、カマ首。襲い掛かろうとして、
くくくくくくくくくくくく十二頭二十四舌。
若い物書きが部屋で見たアノ大蛇とは比べようもない程
おおきな、おおきな、おおきな、
くくくくくくくくくくくく巨蛇でした。
呑み込まれる、と。
思った瞬間、、巨蛇の動きが止まりました。
若い物書きの胸に灯る、
キャンドルの柔らかき、、ゆ、らめ、き。

ゆゆらん　　ゆるる蛇頭の美は　アメジスト
 ゆゆらん　　しなる蛇頭の美は　サファイア
 ゆゆらん　　うねる蛇頭の美は　エメラルド
 ゆゆらん　　ふれる蛇頭の美は　ルビー

ゆゆらん　　ゆれる蛇頭　　なみだの翡翠
 ゆゆらん　　しなる蛇頭　　なみだの琥珀
 ゆゆらん　　うねる蛇頭　　なみだの水晶
 ゆゆらん　　ふれる蛇頭　　なみだの真珠

ゆゆらん ゆれる蛇頭 めばえる心 ピンクフローライト
ゆゆらん しなる蛇頭 めばえる心 ムーンストーン
ゆゆらん うねる蛇頭 めばえる心 ローズクォーツ
ゆゆらん ふれる蛇頭 めばえる心 アクアマリン

愛らしく、儂げな、連れ添い。
キャンドルの妖精のやさしい歌声。
それは、いつしか
若い物書きと妖精二人が奏でる美しい詩へと・・・

2. 一の詩 「桜」

『宝石の目をもつ十二の蛇頭のための十二の花の詩』

桜

ゆゅらん

ピンクフロライトの優しい色、揺れて、

春の園__

（あまやかな花びらを、

（魔法のジャムにそーっと漬け込み、

（桜のお茶会に。

「ロシアンティーはいかが？」

君はシフォンのドレスで微風のように僕を迎え入れる。

満開の桜が枝垂れる、館のテラス__

白いレースのテーブルクロス、青い薔薇咲くティーカップ。

「ウサギさんのお友だちのためにキャロットケーキを焼いたわ。」と君。

「クマさんの友だちにはアップルパイを焼く？」と僕。

「焼くなら、パイよりタルトが好きだわ。」と君。

すり、抜、ける～そよ風～

「ウサギさんのお友だちには魔法のジャムティーよ♪」と君。

「魔法なら、もうとっくにかかっているさ。」と僕。

そよ風は、君をつつんで*桜色*

3. 二の詩 「サガリバナ」

『宝石の目をもつ十二の蛇頭のための十二の花の詩』

サガリバナ

ゆゅらん

ムーンストーンの優しい色、揺れて、、

南の島、マングローブの林__

七色の光の花、ぼんぼりと浮かびおり。

ふらふふう

ふらふふう

ふらふふう

月明り__

ゆれる小舟は、金の夢。

櫂のしずくは、銀の夢。

わたしは、鳥。

わたしは、魚。

わたしは、花。

あなたの腕のなか、

幾たびでも生まれ変わる。

羽ばたいて、

跳びはねて、

甘やかに咲き開く。

星流れ__

君の唇、花の蜜。あますところなく吸い取って、、

そんな風に...のって翼を広げたら、

夢は七色の彩りを君の黒髪に飾るだろうか。

「私はトビウオよ。浪の花のうえて流線形を描くの。」

「あれ？ウミドリだったんだろ？」

「ふふふ、ほんとうは南の島の花。」

「・・・いつか君に、月夜のサガリバナ見せたいな。」

君の胸、ペンダント。

君の指、ムーンストーン。

陽の光を知らずに、、哀しいまでに、白く細くて、、

「いつでも貴方の瞳で見てるわ。」

「生まれ変わったら、って。今日は言わなかったね。」

白い光のなか、消え入りそうに、、君が微笑む。

4. 三の詩 「薔薇（ばら）」

『宝石の目をもつ十二の蛇頭（じゃとう）のための十二の花の詩（うた）』

薔薇（ばら）

ゆゆらん

ローズクォーツの優しい色、揺れて、

花の香に

恋はこの世のまぼろしと

いいふくめても

揺れて浮橋まほろばは

ゆめにうつつに

薔薇の花こんぺいとう。

薔薇の壺（つぼ）にしまっているの。

くリーむ、ほわいと、ぴんく、ぐリーん。

魔法（まほう）のお菓子は、なに色？

花の妖精（ようせい）たち、今日も忙しくお花のお手入れ。

ふわっ*く*ふわっ*リー*ふわっ*む*

お庭のまんなか__

ウォーターリリーの池__

ウォルナットツリーの浮橋__

愛らしい薔薇姫。

今日も、おてんばな蛙（かえる）捕り。

くわっ*ぐ*くわっ*リー*くわっ*ん*

葉っぱを、、、跳（と）びうつる、

虫とり網（あみ）で、、追っかける、

Jump Chase

Jump Chase

Jump Chase

ぐらっ*ほ*ぐらっ*Y*ぐらっ*と*

浮橋ゆれて、、白ドレス、Dive!!!

花の妖精。

あわてて薔薇の壺から花こんぺいとうを1粒、
薔薇姫のお口に、ポン☆魔法のぴんく1粒。

愛らしい薔薇姫。

風の王子が〈あぶない！〉抱きとめた。

あらっ*ぴ*あらっ*ん*あらっ*く*

薔薇の蕾（つぼみ）が咲く、咲く、咲くよ、

（ドレスも、

（チークも、

（ハートも、ぴんく色。

花の妖精たち、今日も忙しくお花のお手入れ。

ふわっ*く*ふわっ*リー*ふわっ*む*

お庭のあずま屋__

ウォーターファウンテンの大理石__

ウォルナットウッドの腰掛（こしかけ）__

愛らしい薔薇姫。

今日は、風の王子に‘愛のポエム’を囁（ささや）かれ。

胸のペンダント。

きらっ*ぴ*きらっ*ん*きらっ*く*

めでたし、めでたし^^

5. 四の詩 「初恋草」

『宝石の目をもつ十二の蛇頭（じゃとう）のための十二の花の詩（うた）』

初恋草

ゆゅらん

アクアマリンの優しい色、揺れて、

アクアマリンの娘よ、時の川に。

瞳を閉じて、ねむれねむれ。優しく、ねむれ。

ゆゅらん、定めの時が来るまで。

ゆゅらん、定めが詩が訪れるまで。

「時空パトロールの途中、Fの領域で見つけたんだ。」

「Fの領域？あそこは今、光の大潮が引いたばかりでしょ。」

「潮が引いた後、青い月に照らされて、このアクアマリンが輝いてたんだ。」

「どこから来たのかしら。それにしても可愛い娘ね。」

「カプセルのなかでずっと眠ったままなんだがね。」

航海の護り石、

アクアマリン。

青い月の光に照らされて。

時の川に、

眠る娘の胸に☆キララ

神秘の力。

「ママ、この娘、誰？」

「すごく可愛いでしょ、うふふ、海の精の宝ものよ。」

「え？」

「冗談よ。パパがFの領域で救助して連れてきたのよ。」

「僕も、早く時空パトロールしたいな。」

透きとおる、淡く、沫く、青く。

アクアマリン、の娘。

びーと、はカプセルの揺りかご__

目をお覚まし、ほら。

（まだ時間は、そとがわ。）

目をお覚まし、ほら。

（まだ時間は、あちらがわ。）

キス、きみの髪。キス、きみの頬。

ふれても、イ、イ？

NO！NO！ゆめでも、ムリ！

初恋

はつこい

初恋

はつこい

「クウルボウイが、うふふ、初恋草の鉢植えとはね。」

「ママ、からかわないでよ。」

「幸運を祈ってるわ。」

「この娘が目をお覚ました時、花を咲かせてるといいなと思って...。」

目をお覚まし、ほら。

（もう時間は、うちがわ。）

目をお覚まし、ほら。

（もう時間は、こちらがわ。）

——初恋草 BLOOMING ♪——

（アクアマリンちゃん、僕から君への贈り物だよ。）

6. 五の詩 「ヒスイカズラ」

『宝石の目をもつ十二の蛇頭（じゃとう）のための十二の花の詩（うた）』

ヒスイカズラ

ゆゆらん

なみだの翡翠（ひすい）、こころ揺らして、

スカイラウンジ『翡翠』__

美人歌手による「色彩のブルース」他

ピアノの弾き語り

翡翠色の特製カクテルのお披露目

@ステージ袖

ピアノ弾き： 俺はフルーツバットさ。君っていうヒスイカズラの色香に魅かれて
一生離れられないってわけさ。

歌手： そうして私は翡翠の夢を見続けて、密林のステージで今夜も拍手の
スコールを浴びるのを待ってる。

@テーブル席

客A： あの歌手、美人ね。翡翠色の花柄ドレスがよく似合ってるわ。
ヒスイカズラの花、今日の貴方の写真展でも見たわ。

客B： 君に来てもらえてホント嬉しいよ。
あのフォトは、ルソン島で撮ったんだ。絶滅危惧種（ぜつめつきぐしゅ）なんだよ。

@カウンター席

客C： 彼は女性同伴か。一緒に飲んで話がききたいな。

客D： 例のヒスイカズラの写真家ですか。お邪魔ですよ。

バーテンダー： お待たせいたしました。カクテル‘ヒスイカズラ’でございます。

蝙蝠（こうもり）な夜、ヒスイ色の魅惑が
魔法をかける。

ピアノの前、

スポットライトに捉まえられ。

夜は

ここから動かない。

7. 六の詩「酔芙蓉」

『宝石の目をもつ十二の蛇頭（じゃとう）のための十二の花の詩（うた）』

酔芙蓉（すいふうよう）

ゆゆらん

なみだの琥珀（こはく）、こころ揺らして、

さよなら、は哀しい化粧鏡です。

＊メタモルフェーズ。

時間のくれた、ねむり窓。

涙のきらめき、しずく泡。

＊メタモルフェーズ。

遥かな、ちいさな約束。

光が満ちるとき、現れよ。

時に護（まも）られし、気高き精よ。

美酒の馨（かぐわ）しき。

（庭に咲く、酔芙蓉。

（花びら白く、

わたしね、哀しいときには...、触れてみるの。」

（君の瞳、長い睫ふせて。

（指が、琥珀にふれる。

光が、琥珀に虹を目覚めさせる。そんなふうにな、

（虹色の琥珀。

（光に反応して、七色を現す。

哀しみの中からだって希望が羽ばたく。。。気がするから。」

（陽を浴びる、酔芙蓉。

（ほんのりと、やがて、あざやかに、花びら紅く。

美しい人、の

琥珀よ。

時間を七色の彩りに変えて。

ねむる、

ねむる、

ねむる、

目覚めは、くく 酔芙蓉のように。

陽の愛撫――

やわらかに、触れて、

はげしく、口づけて、

はかなげに、抱いて、

8. 七の詩「月下美人」

『宝石の目をもつ十二の蛇頭（じゃとう）のための十二の花の詩（うた）』

月下美人

ゆゆらん

なみだの水晶、こころ揺らして、

銀色の鬘（たてがみ）をなびかせ天馬が翔けてゆく、
月の照りと翳（かげ）りに軽快な跳躍を映し、
水晶の目、
透き通すように地上に蠢（うごめ）く闇を閃光する、
遥かなる自由への嘶（いなな）きを響かせて、

◆その天馬とはじめて出会ったのは、
美しい月の波、窓辺に寄せる晩。
そのころテディーベアだったから、わたし。
水晶の目を氷砂糖だと思ったの。
だって世界で美しいものは、甘くてステキ。

◆つぎに出会ったのは、
コトコトコットン荷馬車のうえ、流れ星降る晩。
麦藁帽子（むぎわらぼうし）だったのね、わたし。
水晶の目をガラス玉だと思ったの。
世界で美しいものは、ポケットの宝物だったんですもの。

◆つぎに出会ったのは、（どこだったかしら
揺れる青いマストを見上げると、天の川が流れていた晩。
わたし、たしかハーモニカだったわ。
水晶の目を天体鏡だと思ったの。
だってね、世界で美しいものは、宇宙のハーモニー。

◆つぎに出会ったのは、

川面に映る蛍ふんわり、灯みちの晩。
夢みるウサギですものね、わたし。
水晶の目を涙だと思ったの。
世界で美しいものは、心が感じてる。

◆つぎに・・・

僕は、クスクスとおかしくて笑った。
君は相変わらず、不思議の国のアリスのままだね。
いつか君が、月下美人になる晩、
僕は銀色の鬘を輝かせて、君を迎えにゆこう。
君は知るだろう。
水晶の目が、君を愛し続けた僕の心の目だと。

青月映す麗しき影あり
その名も
「月下の美人なる」とぞ

花よ一夜の爛漫（らんまん）や
咲いて悔いなし
うたごころ
この世の命あらん限りに
愛でる心の美しき

9. 八の詩「スノードロップ」

『宝石の目をもつ十二の蛇頭（じゃとう）のための十二の花の詩（うた）』

スノードロップ

ゆゆらん

なみだの真珠、こころ揺らして、

「白くて可愛いお花、スノードロップさん。
やさしいおとぎ話、今夜もきかせてね。」

真珠姫は愛らしく、毎晩
ベッドの中からスノードロップにお話をねだるのでした。
えっ、お花がお話しするなんておかしいですって？
でも真珠姫のスノードロップはそうなのです。
今夜のお話は『よるのおはなし』。

／夜はfushigiな満ち潮。。

眠るオモチャの果実
＊りんご・めろん・もも・まんどお＊
お伽（とぎ）の果汁がつまってる、
☆
☆夢のサーカス☆

(^ ◇ ^)

くっくるぐっぐる鳩胸 ウォーク◇

^ (ー。ー) ^

くるびよい兔の耳 チャット♪

～＜°＝＝＝＝＝＝＝＝＝

しゅるにゅろ蛇 ベリーダンス#

(= ^ ~ ^ =)

くるくりん猫鍋 ナップ@、、

／夜はfushigiな引き潮。。

魔法の杖はトチの大木、
呪文のコトバを吹きかけて
月夜を覆う闇マント、
蠢（うごめ）く魔物が誘う風笛、
ねむれ、
ねむれよ、、

／夜はfushigiな。。fushigiな。。

こうして、
真珠姫は幸せに暮らしていました。
ただ困ったことが、1つ。
ちっとも真珠姫はおおきくならないのです。
少女のままなのです。
国中から知恵者がやってきました。
けれどさっぱり原因がわからないのです。
そこで真珠海の賢者に助けを求めることにしました。

いかにもの風貌、風体、
真珠海の賢者。
穏やかなる静聴、黙考、
言い伝えの螺旋（らせん）は
途切れることなく...

王家の美しき真珠、
秘めたる力
あらわれよ

あらわれよ
4千年の眠りから覚め
愛
それゆえに輝け

「この‘七色の王家の真珠’を姫の胸元に飾るがよい。
謎が解かれるとき純白の真を輝かすであろう。」

胸元には1粒の大粒真珠。
真珠姫は愛らしく、いつものように
ベッドの中からスノードロップにお話をねだりました。
すると、
スノードロップはいつものようなおとぎ話ではなく、
愛のコトバをきかせました。

ア		
	そ	
イ		い
	れ	
シ		い
	だ	
テ		た
	け	
ル		く
	が	
		て

次の日、朝陽の中__
真珠姫は一晩のうちに美しい乙女へと成長し、
その寝顔はシアワセに満ち溢れていました。
ベッドの傍らには、
いつもあるはずのスノードロップはなく、
替わりに、
腰掛けて眠る若者の姿が美しく輝いていました。

そして、

‘七色の王家の真珠’の大粒の中に、
もう1粒の真珠が。
――純白の真――

10. 九の詩「藤」

『宝石の目をもつ十二の蛇頭（じゃとう）のための十二の花の詩（うた）』

藤

ゆゆらん

アメジスト魅惑のしずく、こころ揺らして、

うすぎぬの舞、あまやかなる色香（さわさわと

天つヶ原をながれおり

いかなる花のいざないと男神の地上みおろし

藤浪ゆらす羽衣に

かくも雅をえがく舞すがた、興あれと

紫のきらめきふりまいて

しばし打ち鼓、と一んと響かせご満悦。

ふるやふるや千々に紫立ちたる光輝

天上人の興しずく

うすぎぬ染まりて鼓に拍子を合わせて

（といつとと一ん

白足袋かるやかなる跳びとび踏みふみ

花は浪うつ藤のいろどり鼓うつ

天地しばしの共しらべ

悲涙の大蛇（おろち）も今日とては

雅ごころに鎮まれり

いとおかし、と天つヶ原より女神

すずなり鈴ならして加勢する

（しゃしゃりん

袖はふるふる鶴を舞う

蔓はのぼりて花と舞う

さらなる興よ、と女神が月よび

明かり藤

紫のなみうつ、きらめき姫冠のごとく、

藤の舞宮

月照にあらわる、稀代の名手よ、

竹の笛人

(といつととーん (ぴーひゅる (しゃしゃりん (とーん

(といつととーん (ぴーひゅる (しゃしゃりん (とーん

みやびなるかな

みやびなるかな

「藤浪（ふちなみ）の花は盛りになりにはけり…」

万葉集より

11. 十の詩「苧環（おだまき）」

『宝石の目をもつ十二の蛇頭（じゃとう）のための十二の花の詩（うた）』

苧環（おだまき）

ゆゆらん

サファイア魅惑のしずく、こころ揺らして、

「しづやしづ しづのおだまき くりかえし…」 静御前

苧環の咲くこころざし、女だてらの必勝祈願。
彼の魔界国との境には今も戦（いくさ）、ありて。
琴を爪弾く風雅、たえて。

「十八すぐれば、いずれ魔界国の人身御供。
出陣にありても、明鏡止水。
たとえ冥境にふみいれようと。」

青紫の袴もいさましく （（哀しくして
ぬれる黒髪ゆいあげて （（ほぐし髪
つるぎの舞を奉り （（三絃琴の音かなで

侍女ども、咽（しの）びて
花は幾輪咲きたるを、
おだまきいとまき
末の姫宮たぐられて
かくも麗しきを
魔界の国に嫁すさだめ
おいたわしや...

魔界国との境

霧中の合戦、刃、交えるも敵か味方か。
ぞぞぞぞぞぞ、どどどどどど、

ぞぞぞぞぞぞ、どどどどどど、
ぞぞぞぞぞぞ、どどどどどど、
ぞぞぞぞぞぞ、どどどどどど、
ぞぞぞぞぞぞ、どどどどどど、
ぞぞぞぞぞぞ、どどどどどど、
ぞぞぞぞぞぞ、どどどどどど、
ぞぞぞぞぞぞ、どどどどどど、
ぞぞぞぞぞぞ、どどどどどど、
ぞぞぞぞぞぞ、どどどどどど、

苧環の姫宮、白馬に騎乗せり。

武勇の疾風、みちをひらいて。

俄かに、霧はれて。

守護の壁境を取り戻せり。

夜露をゆらす、偲び笛さえて、、、故郷を想う。

いつれの人やある、・・・誘われて、

月。。雫。。

魔界国の名手、月笛の君。

浮びあがる輪郭、（しばしの。。

「この深青色の石は、‘魔界の秘宝’とよばれ、

勝利を授けてくれるものです。

私ども魔界国の者は誰も、この輝きの前には無力です。

苧環の姫宮、私から貴女への愛の証に....。」

苧環の姫宮、白馬に（（朝陽））秘宝のカガヤキ。

すべて、なべて、地に這う、剣、剣、剣。

無／／敵／／

遂に、対に、終に、

月笛の君、美しき人の、、目を見る。

姫宮のふりかざす刃にも、、目をみる。

かくて・・・

侍女ども、色めいて

めでたや

和みの国になりけり

末の姫宮（嫁して

ういういしくも花のほお

月の笛ひびきて

12. 十一の詩「花筏（はないかだ）」

『宝石の目をもつ十二の蛇頭（じゃとう）のための十二の花の詩（うた）』

花筏（はないかだ）

ゆゆらん

エメラルド魅惑のしずく、こころ揺らして、

森はねむる わたしにねむる

ひみつの葉っぱ

（ウサギのゆめのなんばんめ

^（-。-）^

（ハトのとけいのこんばんは

（^◇^）

ことばの森に かくれんぼ

花のほうせき いちまい1つづ

花筏・・

ながれてゆきましょう

時の川

さらら さらら 音たてて

あなたにきこえるように

よどんだら

小さなさざなみ

逃がし舟

木漏れ日ふわり

掬って...

いつでも近づいて

手に触れようとして

ふっ 遠ざかってしまう

ガラスの 光 水面ゆれて 風

儚い想いは シャボン玉

しまった時間が

バチン

瞳に

は

じ

け

そっと

いろをぬる

ゆ

め

の い

ろ エメラルド

もりの

ほうせき

☆

((花 筏))

13. 十二の詩「金魚草（スナップドラゴン）」

『宝石の目をもつ十二の蛇頭（じゃとう）のための十二の花の詩（うた）』

金魚草（スナップドラゴン）

ゆゆらん

ルビー魅惑のしずく、こころ揺らして、

るびー、な お話。

きかせて、わたしのお人形。

夜、・・・せつない吐息 （そーっと囁いて

よる、・・・あまやかな調べ （そーと奏でて

お話すきな 金魚草ー・・・スナップドラゴン

おしゃべり蜂が バズズバズズ
花のなかに顔を バズズバズズ

あのね、庭のおきもの ^（ー。ー）^
ウサギからきいた
るびー、な お話

コンクリートいろの、あさ。

そっとセピアの光、こぼれ落ち。

兎が と ん だ。

のはらの野ばら

花びらこちら そちらは戸びら あちらは紙びら

ぺえばあ・ちえいす

こどものゆびきり
ないしょのおはなし
ぬいぐるみ

兎うきうき

わすれんぼ 忘れな草でおもいだす
(ねどこ何処どこにある)

白いベッドの箱。

るびい、な兎のオルゴール。

のはらの歌は ひ み つ。

お話すきな 金魚草ー・ー・ースナップドラゴン

おしゃべり蜂が バズズバズズ
花のなかに顔を バズズバズズ

あのね、庭をおさんぽ (=　　=)
ネコからきいた
るびー、な お話

セピアいろ、言葉にしたら。

ぱらぱら) こぼれ。

ル。ビー。

弾けて、ひかりに消える。

しっぽ

ゆらゆらゆれる月夜みち

、、たくてく、、たくてく、、

鈴をふりふり、ひとりごと。。。

(るびい、な 夜ねえ)

月のウサギと、ゆめをみて。

ものおもいの、屋根のうえ。

お話すきな 金魚草ー・ー・ー スナップドラゴン

おしゃべり蜂が バズズバズズ
花のなかに顔を バズズバズズ

あのね、庭でおしょくじ (^ ◇ ^)
ハトからきいた
るびー、な お話

みらいみらい、のゴビ沙漠。

ハチ 「むかしむかし、でしょ。」
ハト 「いえ、なに、たまにはパターンかえてみよかと（汗）。」
ハチ 「鳩でも汗かくの？」
ハト 「あんまりつつこまないでください。話すすまないんで。」

ビルのなか、ビールにカルビ、好きがこうじて、鳩太りすぎ。
クビがまわらずルビふりホビーもままならず。
しかたがないので庭で、ぽっぽ豆（ビーン）そうじ。

ハチ 「ちょっと、ただのダジャレ話じゃないんでしょうね。」

おやまあ！ビーンのなかから、赤いきらきら顔だした。
なんたってルビー、チビでもコビも売らずにたかく売れ。
鳩がしあわせになったという、、あるビ〜〜ッグ、な お話。

ハチ 「やっぱりダジャレ話だったんじゃないの。」
ハト 「いえ、あの、ヘビーなヘビのルビーの話よりいいかと...。」
ハチ 「蜂（ビー）をなめるんじゃないわよ、バズズバズズ・・・。」
ハト 「ヒ〜〜、ビ〜〜、ぱたぱた...。」

・・・鳩がはちあわせになったという、あ、るビ〜〜、な お話。

るびー、な お話。

つれてきて、わたしの夢の羽。